

「学生とシニアの対話会イン東北‘07」の報告書

平成20年2月8日
対話会推進小委員会 伊藤 睦

概要

1. 実施主旨・目的

東北での対話会は平成18年12月14日開催の1回目に次いで2度目である。第一回には大学側の要請で教員との対話会も実施したが、今回は本来の学生との対話に集中した。

「学生とシニアの対話」は、日本原子力学会の学生連絡会及びシニアネットワーク（SNW）活動の一端として、原子力／エネルギー系を主体とした学生とシニアの交流を図り、学生とシニアとの対話を通して、学生とシニア間の相互理解を図ると共に、今後の原子力、エネルギー産業について共に考え、学生が社会へ出る前に、原子力OBの経験や気概を少しでも吸収できる機会を提供し、今後の実務への自信に繋げてもらうことが目的である。

2. 対話の実施

(1) 日時 平成19年12月13日（木）

13:30～17:00

(2) 場所 東北大学青葉山キャンパス工学部工学研究科、量子エネルギー工学専攻
量子棟

(3) 参加者（敬称略、順不同）

①学生48名（量子エネルギー工学専攻）氏名と所属は添付資料1参照

博士課程6、修士課程29、学部生13

②シニア

・SNW会員（16名）

荒井利治、飯島進、石井陽一郎、石井正則、伊藤睦、岩瀬敏彦、金氏顕、斉藤伸三、菅原剛彦、宅間正夫、竹内哲夫、土田正和、土井彰、林勉、益田恭尚、松永一郎、

・東北原子力懇談会・東北電力OB（4名）

岡部健悦、川村一二三、佐々木俊三、平田和也、（菅原剛彦）、（土田正和）、

（ ）はSNW会員を正とした。

③オブザーバー

・東北電力（3名） 後藤康宏、横式和弘、菅間淳一

・東電原子燃料サイクル部 中島拓男

(4) 実施内容概要

1) 受付開始12:30分

2) 対話会に先立ち、量子棟大講義室に全員集合し学生幹事東北大学工学部石井研

川村悠君の総合司会で開会の挨拶、シニア紹介,基調講演等を実施。



総合司会の川村悠君



石井先生の開会挨拶

- 指導教官の石井教授の開会挨拶
(要旨)

本日来賓の方々にはシニア紹介文の書面には”元〇〇”と書かれているが、元を取ると大変な方々が一堂に会することになり、そのような方々を東北大学に迎えられて光栄に思うとともにシニア対話の重要性を改めて実感しています。本学での開催は今年で2年目を迎えるが、この企画は学生にも大変好評であることから、これからも継続して行っていければと思います。学生にとってはまたとない貴重な経験を得ることが出来る場なので、積極的に自分の意見を述べて今後の人生に生かすことができるように期待したいです。本年度も就職の面ではシニアの皆様方のところにお世話になりに行くのでどうぞ宜しくお願いします。

- SNWの金氏幹事がSNWの活動と出席シニアメンバーを紹介。

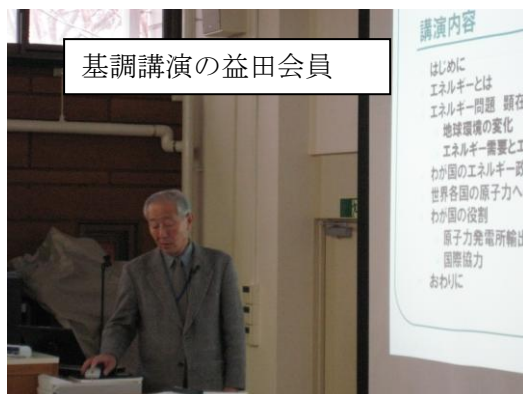


シニア紹介の金氏幹事



会場の量子棟講堂

- 基調講演として益田会員が「エネルギーのパラダイムシフトを迎えー我が国の役割はー」と題して約40分講演。(講演の資料は添付資料2)



2) その後、学生4～5に対してシニアが2名の10班が3箇所（研究室，量子講義室）に別れて対話を行った。（オブザーバーは適宜任意の班に入り対話に参加）

班の構成は事前アンケートを元にテーマが決められており、そのテーマを中心に対話がおこなわれた。グループ編成と討議内容は添付資料1に掲載してある。

実質の対話時間は約100分。



3) 対話終了後まとめに20分の時間を経て、再び大講義室に全員が集まり、グループ毎に学生が対話内容と感想を発表した。会場からの質疑応答を含めてグループ当たり10分程度で実施。

4) 講評を伊藤会員が行った。

要旨

まず、学生幹事の川村君そしてそのご指導された石井先生、岩崎先生他これに協力して頂いた東北原懇や東北電力の皆さんの準備と心遣いで最後の懇親会まで行き届いた運営が成されたことに敬意を表すると共に感謝します。

私として東北は初めての対話会であったが、対話会は2回目より参加して10回以上参加してきた。始めのうちは、大学専攻として放射線、原子力を選択したことへの一抹の不安感を示している学生が多かったが、最近では、今回のテーマに見られるように、今回の対話会は原子力の暗い面や後ろ向きの話が消えて、むしろ、自分達の役目を認識し、それ

を果たす準備の方に関心が移っているように思えた。

最後の発表でも、自分達で原子力を盛り上げて行こうという前向きな決意表明的な発表が多くあり、大変心強く思えた。

我々との話は、自分たちの経験をベースに、いろいろな問題・課題を提示しどう対処すべきかを話し伝える「語り部」的な活動である。決して、「横丁のご隠居さんの小言」や現役の施政を正す「水戸黄門」的な活動でもない。

今回の対話会も、各グループの発表の様に、我々との対話を通じて感じたことが、これから社会人として自立した行動に役立ち、原子力の活性化そして日本のエネルギー自立に繋がることを期待したい。



講評する伊藤会員



学生連絡会紹介をする成田君

5) 最後に学生連絡会の成田君から学生連絡会の活動紹介と入会案内があった。

3. 懇親会

対話会終了後参加学生とシニア(オブザーバーを含む)および下記指導教官が参加して、学内レストラン(こもれびカフェ)で懇親会を実施した。(17:30~20:00)

○懇親会出席された先生(敬称略、あいうえお順)

石井慶造、伊藤悟、岩崎智彦、菊池洋平、北島純男、笹尾眞實子、高橋信、寺川貴樹、新堀雄一、橋爪秀利、松山成男、三村均、山崎浩道

○主要発言者および発言内容

-橋爪秀利(東北大学教員)-

この度も悪天候のなか遠路はるばる東北大学まで足を運んで下さいました。

昨今はエネルギー問題、環境問題の観点からもますます原子力が担うべき役割が大きくなっており、そういった中で本学でも量子エネルギー工学専攻でも原子力人材育成プログラムのもと、原子力分野へ高い能力(教育を受けた)人材を輩出するべく授業カリキュラムの見直しを推し進めております。核燃料サイクル関連技術、特にバックエンド分野の人材育成の強化を図ると同時にこれらの知識を身につけた人材を広く原子力分野に輩出するために学生実験のテーマ見直し(核燃料サイクル関連教育の強化)や六ヶ所等サイトのニーズに応え、世界をリードする先進バックエンド研究の推進、学部4年次の原子力施設・企

業への研修旅行の旅行費の全額負担等の事業を行ってこれからの日本の原子力分野へ貢献していけたらと思います。

本年度も石井先生と共に就職担当になりまして色々とお世話になるかと思いますが、どうぞ宜しくお願い致します。

-竹内哲夫(シニア)-

今回の企画ではもっと議論の時間が欲しいと感じた。特にKY(空気を読む)という話題がまとめで取り上げられたが、最近では世渡りできれば良いという安易な若者が多くなっている。若いうちは周囲をきにせずにもっと自己主張すべきところは自己主張することが必要だ。学生がこれから飛び込む社会は隠蔽、腐敗で荒れた雰囲気のある社会なのだから問題から逃げずに果敢に立ち向かっていく情熱、信念、知力が必要。

-末光洋一郎(学生)-

今回初めてこの企画に参加させて頂いたが学校の先生方とは違った視点で原子力分野についてご教示頂き、あらためて原子力界に期待、希望を見出すことが出来ました。新たに研究所、企業の関係について知ることが出来き、特に企業側の取り組みがわかったので、これから就職活動を控える自分には得るものが大変多い企画になりました。普段あまり原子力のことについて家族や友人と会話することもなかったので、これを機会にこのエネルギー問題の話題に挙げていければと思います。

-土田正和(シニア)-

私の班はテーマが抽象的で大変難しい事について議論したが、最後にはよくまとめられていたと思う。

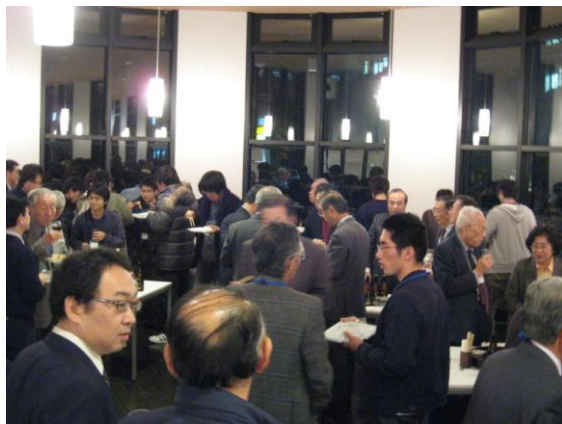
あなた方(学生)は将来ただのエンジニアになるのではなく、リーダーになって日本の将来を担っていく事が求められる。

社会に出て行くうえで重要なのは一生懸命(まじめ)で、嘘をつかない(誠実)、そして素直である事。これが出来れば成功する。

原子力系の理系の方は難しい専門用語をよくしようとするが、それでは事務方の我々でさえ理解できないし、ましてや住民の理解は得られないので、より判りやすく伝えることが重要である。

○懇親会写真

「対話会イン東北大学 ‘07」 報告書



4. 事後アンケート結果の概要

対話会としては今回初めてシニアからも事後のアンケートをとった。

毎回実施している学生のアンケートと共にその結果を添付資料 3, 4 に記載したが、概要は以下の通り。

1) シニアの事後アンケート結果の概要

対話会についてはほぼ全員が満足しており、学生の熱意についても皆熱心だったと評価している。対話会の雰囲気は数名の人が対話会場を狭いと感じていることそして時間が不足を指摘しているが、これはこれまでも話題になっている事であり、今回の特別な問題ではない。

予めテーマを決めていたことについて、良かったとする人の割合が70%であったが、やはり良い面と悪い面があるようでテーマの選定が大変難しいことが浮き彫りにされた。最後に大多数のシニアが次回も参加したいとの意思を表明されており、今回の対話会はシニアのメンバーにも納得のいく対話会だったようである。

自由記載のところは忌憚りの無い意見や提案があり是非ご一読願いたい、多くのシニアが学生の皆さんが確かな問題意識を持って、積極的な発言（質問、自己主張）をしてもらいたいと思っていることが認識される。

2) 学生の事後アンケート結果概要

講演内容については一人を除いて満足している。何度も聞いた話が多くてやや不満と答えた一人は以下のアンケート項目についても他の人と違っており、相当勉強していると自認しているようだ。

対話についてはやや不満が3名いた。その理由は夫々違っており、(部屋が小さく、聞き取り難い。アンケートに沿った話が聞けなかった。事前に聞きたいと思っていた事が聞けなかった。)特に抽出すべ問題点は無いが、次の質問に対して「聞きたいことがあまり聞けなかった」と答えた人が9名もいる事と合わせると、我々シニアも対話の中で相手から意見や質問を引き出す工夫が必要と反省すべきであろう。

満足したと答えた理由も夫々であり、特にこれが良かったとするものはなく、今回の対話会は全般的に良かったと評価できる。

5. 感想概要

恒例により、参加シニアから感想文を提出してもらった。全体は本報告書の添付資料 5 として掲載したがその概要を下記する。

1) 会の運営などについて。

会場のアレンジが大講堂での講演、学生の発表、講評と、別室(2部屋)での対話と機能別の分け方であったため非常にスマートで、聞きやすかった。またスケジュール通り円滑に進められたことなどは、対話会の準備にあたった学生幹事そのご指導された石井先

生、岩崎先生またこれに協力して頂いた東北原懇や東北電力の皆さんそしてシニアの幹事の方の大変なご苦勞の賜物である。

参加メンバー、全般の進行、議題設定については関係各位の周到な準備に対して、満足している。

2) 対話会の雰囲気

学生50人弱に対して、シニアが20名近く参加して、5:2の対話ができよかった。

学生は熱心にシニアの話に耳を傾けていたが、学生側からの発言が少なく活発な議論にはならなかった。その理由は、東北人の口下手のせいではなく、学生とシニアの圧倒的な知識経験の差でシニアに圧倒される事と自分の父親より年上の人に対しナニヲドウ聞いたらいいか戸惑いが有ったからではなかろうか。それにしてもシニアの方ではもっと学生に話をさせる工夫がいるし、学生側もテーマに沿って事前に勉強をして、質問や意見を纏めておく努力をする事を望みたい。

3) テーマの選定と学生の関心分野について

今回テーマを最初から決めておいた事は対話を円滑に進める上で大変良かった。

ただ、テーマによってはそのテーマに嵌まり込んで折角のチャンスをシニアに聞きたいことが聞けなかったケースも有ったようである。また、テーマによっては学生側が聞き手に回ってしまわざるを得なくなり、このことが対話で学生の発言が少ない要因の一つにもなっていると思われる。何処の対話会でも同じであるが、テーマの作り方の難しさを改めて思い知った。

今回のテーマは、これから社会にでる準備に関わるテーマ(4件)、社会のエネルギー危機意識を変えるにことについて(2件)、原子力の問題(2件サイクルと海外情勢)と報道問題、反対派の説得問題の計10件であった。昨年のテーマで11件中8件が(原子力の受容の問題としての放射線に対する社会の偏見)に関するものだったことに比べると今回は原子力の今後に対する期待や不安についての関心より、これから自分たちが社会人として何を心掛ければよいかをシニアに学ぼうと言う学生が多かったようで、時の流れを感じさせられた。

4) 対話会後のグループ発表について

今回のグループ発表は発表毎にフロアから質疑を受けたことで盛り上がった。一方時間が掛かった事は否めない。せっかくの機会であるので、同じようなテーマをまとめて発表させグループの学生同士が質疑をするように仕向けるのも面白いのではないか。

5) 懇親会について

多くの先生も参加されて大変盛り上がった。

場所も良く、ざっくばらんに話ができ、対話の補足ができた。

以上

添付資料

1. グループ編成と対話の要旨(対話の内容)
2. 基調講演資料(益田会員の使用PPT)
3. 事後アンケート結果(シニア)
4. 事後アンケート結果(学生)
5. シニアの感想文

添付資料 1

対話会のグループ編成と発表要旨

1 班

テーマ：日本人全体のエネルギー危機意識を変えるためにはどうすべきか？学生はどうすればよいのか？

- ・ シニア；竹内哲夫、佐々木俊三
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
橋爪研	D3	佐竹正哲
橋爪研	M1	阿部祐子
笹尾研	B4	柏総一郎
笹尾研	B4	長村隆行
石井研	B4	中沢浩一

〔要旨〕

はじめにエネルギー危機意識を感じさせる出来事についてから議論を始めていった。ガソリンの高騰、食料品の高騰などがあるが、それらの原因や生活に及ぼす影響があまり国内で話題にならない。この理由にはエネルギー問題についてのマスコミの対応や石油が無い時代を知らないが故に石油枯渇の深刻さが理解出来ない等がある。こういった問題を解決するにはマスコミ報道の改善と伝えられる情報の間違いや重要性を正しく把握する知識を国民が持つこと、そしてそれを実現するための教育システムの改善、社会的問題に関して積極的に議論をするように心掛ける事が重要になってくる。



2 班

テーマ：学部でエネルギー全般を学ぶ(広く浅く)事を社会、企業はどのように考えるのか、
また評価するのか？

- ・ シニア；荒井利治、菅原剛彦
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
石井研	M1	坪井真太郎
橋爪研	M1	松井章
若林・高橋研	M1	勝呂元
長谷川研	B4	呉屋祐樹

〔要旨〕

学生がエネルギー分野全般を学ぶことに対する姿勢について、就職やそれに対して企業(社会)が求める学生像といった身近な分野について対話を行った。対話では”T字定規理論”というものが取り上げられ、一般教養と専門性のバランスの重要性について解説があった。一般教養という土台がきちんと確立していないとT字のバランスが悪く、高い専門性を十分に生かせない。そのようなことから学生時代にうちにエネルギー分野全般を幅広く学んでおくことで、社会に出て種々の専門分野に柔軟対応でき、専門性を生かすことが出来る力をつけることが学生に求められている。



3 班

テーマ：原子力に関わる仕事にはどういったものがあるか？

- ・ シニア；飯島 進、益田恭尚
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
岩崎研	M1	小形好弘
兼四竈研	M1	末光洋一郎
石井・寺川研	M1	有川潤
若林・高橋研	M1	田嶋尚之

〔要旨〕

原子力界にはどのような仕事があるのか、実際に企業はどういった取り組みをおこなっているのかについて議論した。このグループは東北大学工学部量子エネルギー専攻の主催する企業見学に全員参加した学生で構成されていたので、どのような仕事があるかという議論に更に付け加えて原子力関係の仕事の広がり、メーカーと協力企業との関係や企業における研究開発のついても話が及んだ。現在の企業、研究機関、電力会社の三角関係とそれを管理する国という社会全体のシステムについての理解を深め、また原子力関係にある仕事の種類からその仕事を抱える課題、さらに進んで原子力界全体が抱える風評被害、マスコミ報道、教育問題等についても話が持たれた。



4 班

テーマ：海外の原子力情勢について

- ・ シニア；岩瀬敏彦、金氏 顕
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
長谷川研	D1	柿沼永郎
長谷川研	M2	山川隼文
岩崎研	M1	松本洋
長谷川研	M1	佐藤隆司
笹尾研	M1	梅津創

〔要旨〕

現在の世界規模での原子力界の変革、日本の原発メーカーのビジネス展開の可能性、化石燃料の枯渇の恐れや地球温暖化抑止のために、世界規模での原発設置の期待があるという話題を皮切りに議論が進められた。日本は原子力先進国ということでその技術の絶やすことなく技術の継承と普及が求められている。これからますます機会が増える海外進出、国際協力では相互理解と法令の遵守が強く求められ、それを実効するためにはチームワーク、コミュニケーションが大切である。特に語学力(英語力)はこれからのボーダレスな社会に必要な不可欠で、学生は自分の専門分野の技術の修得に併せて英語力を磨くことが肝要である。



5 班

テーマ：学生は社会に出るにあたってどのような力を付けるべきか？

- ・ シニア；伊藤 睦、平田和也
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
三村・新堀研	D2	呉 艶
笹尾研	D1	田中のぞみ
笹尾研	M1	菊池政寛
石井・寺川研	B4	秋山久樹
長谷川研	B4	原法義

〔要旨〕

学生が社会に出るにあたってどのような力をつけるべきかというテーマについて議論を行った。非常にテーマが抽象的なテーマであることや自分の親よりも年配の先生方に何をどのように聞いて良いのか戸惑う時が多くあり、対話はシニアからの質問に対して学生が答えて、それに対してシニアが過去の経験や原子力に対する思いを基に議論を広げていくという形になった。対話では原子力を取り巻く問題(マスコミ報道、風評被害)に対してどういった対応が必要でそのためにどのような力を付けるべきかについても議論されたが、まとめでは対話を通しての課題でもあったコミュニケーション能力の向上や、社会の動きに目を向けて的確に課題を捉える能力が必要であると結論付けた。



6 班

テーマ：原子力反対派に対しどのようにアプローチ・説得していくべきか

- ・ シニア；石井正則、川村一二三
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
橋爪研	M2	小原啓
若林・高橋研	M2	平山宙哉
若林・高橋研	M1	宮田浩紀
若林・高橋研	M1	田島匠
若林・高橋研	B4	奥田健太

〔要旨〕

日本であまり理解を得られていない原子力についてどのように対応していくのかについて議論を行った。対話では原子力アレルギーを和らげるためには原子力を正しく理解してもらう事が重要であるという事を話の軸に議論を進めていった。話題は情緒的反対論に対しては論理的な説明が必要、理屈を理解して貰えない場合もあるがそういった状況では説明する人が信用されていることが重要、反対論者を 0 にすることは出来ない、小中高での原子力教育プログラム等があったが、このテーマで設定された問題には誠実で地道に粘りよく取り組んでいくことが求められると結論付けた。



7 班

テーマ：核燃料サイクルの現状と今後

- ・ シニア；宅間正夫、松永一郎
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
橋爪研	M2	山岸瑛
笹尾研	M1	佐藤義文
橋爪研	M1	蛭原勇紀
石井研	B4	藤川誠
石井研	B4	高橋健太郎

- ・
- ・

〔要旨〕

現在の原子力発電のサイクルは軽水炉サイクルであるが今後は高速増殖炉サイクルの導入が進められている。2008 年のもんじゅ運転再開を皮切りに 2050 年までに商用炉建設をめざしている。プルサーマルも 2010 年から九州、四国、中国、中部の順で逐次実施される予定となっている。このような大きなプロジェクトを実現するにあたり課題となっているのが、高レベル放射性廃棄物採集処分施設候補地の選定等の地域住民の理解や国民の理解(世論の影響で開発が停滞する)が何よりも重要になってくる。



佐藤義文さん・蛭原勇紀さんの発表

8 班

テーマ：原子力報道の在り方

- ・ シニア；石井陽一郎、林 勉
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
長谷川研	M2	佐々木修斗
長谷川研	M2	大竹伸幸
石井研	M1	山下航
長谷川研	M1	永田悠也
石井研	B4	大倉暁

〔要旨〕

この原子力界で以前より危惧されている、原子力とマスコミの関係等について議論をもった。この業界と他の産業との大きな違いのひとつが放射線であるが、タネナシ西瓜や重粒子線治療等の放射線がもたらす効果もあるが、マスコミでは負のイメージを大きく取り上げる傾向にあるので、本当にごく少量でしかない原発での放射線の漏れの方を優先して報道する。こういった報道に対しては国民がそれが危険かどうかを判断できる知識を備えていないことが問題で、シーベルト、ベクレルといった単位に馴染みがないことが一因となっている。こういった対策として、初等、中等、高等と系統的に原子力・エネルギーを学ぶ事や原子力施設での見学、実験を効率よく取り入れていく必要があるといった事について話し合った。



佐々木修斗さんの発表

9 班

テーマ：学生は社会に出るにあたってどのような力をつけるべきか

- ・ シニア；土井 章、土田正和
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
石井研	M1	中村賢治
石井研	M1	丹羽一貴
岩崎研	M1	名久井敬
若林・高橋研	M1	金田知剛
長谷川研	B4	赤松仁

〔要旨〕

学生が社会に出るにあたってどのような力をつけるべきかという抽象的なテーマについての議論だったのでシニアの先生方の経験を基にして話を膨らませていった。学生が身に付けるべき力は広い基礎知識とそれを実行できる知識、更には前向きな姿勢が重要である。特にこの前向きな姿勢は”勝者の理論と敗者の理論”という 2 つの異なる姿勢を比較していった具体的なイメージを掴んでいった。将来エンジニアとしては先ずは専門分野に精通することが求められてくるので、そのためにも学生時代は基礎的知識を十分に積むとともに、幅広く他の分野にも関心をもっておく事が重要である。



10 班

テーマ：日本人全体のエネルギー危機意識を変えるためにはどうすべきか？学生はどうすればよいか？

- ・ シニア；岡部健悦、齋藤伸三
- ・ 学生；

研究室	学年	氏名
石井研	D1	川村悠
橋爪研	M1	吉田和弘
石井研	M1	渡辺未樹
岩崎研	B4	狩野達也
石井研	B4	千葉惇史

〔要旨〕

日本人全体のエネルギー危機意識を変えるためにはどうすべきか？という議題に入る前に、“エネルギー危機意識とは何か”という事から議論を進めていった。というのも、エネルギー危機と一口に言っても、エネルギー問題には世界的なエネルギー資源が枯渇に向かっていること、日本はエネルギー資源小国であること、地球温暖化と様々有り、それぞれに対応が異なってくるためである。そこで危機意識について議論をしたうえで、この危機意識がわからない現状について、我々は何を訴えたいのかをもっと明確に持つことの重要性について学んだ。原子力への理解が低い我が国にではもっと、国会での討論、シンポジウムやホームページの作成、マスコミの有効活用、生涯教育・学校教育といった教育活動の充実とともに草の根活動が重要である。



以上

添付資料 3

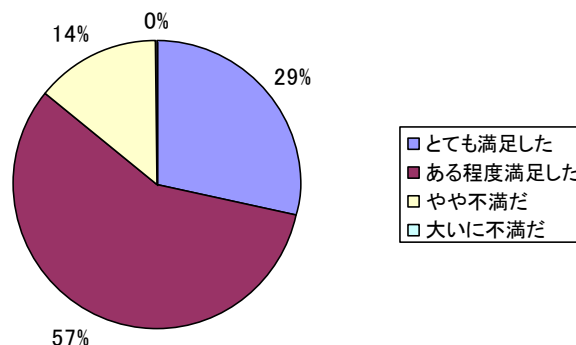
事後アンケート集計 (シニア)

総回答数：21 (参加者 23 名だったのでアンケート回収率は 91.3%)

対象：学生とシニアの対話 in 東北 2007 にご参加頂いたシニアの方々

(1) 対話の内容は満足いくものでしたか？ (理由についてもお願い致します)

- ・ とても満足した …6
- ・ ある程度満足した…12
- ・ やや不満だ …3
- ・ 大いに不満だ …0



〔理由〕

～とても満足した～

- ・ 決して雄弁では無いが、こちらの言うことを理解し的確な反応があった
- ・ 原子力分野にどのような仕事があるか全体的な知識を持っており、当方からはもう少し内容を説明する展開であったので議論が噛み合ったと思う。
- ・ 自分の将来について不安と希望が強いので熱心に討論できた
- ・ 個々の学生の方の将来に向けた強い意志が感じられた
- ・ シニアが話し過ぎたきらいもあって反省しているが、学生さん達が極めて熱心に耳を傾けてくれた
- ・ 学生が熱心にディスカッションに参加し、盛り上がりがあった

～ある程度満足した～

- ・ 個々の意見を述べることはできたが、十分な議論は出来なかったかもしれない。議論を円滑にするコーディネータ的な役割の人間が必要だと思う
- ・ 熱心に対話が出来た
- ・ 皆それぞれテーマについての関心をもっているが、知識はあまりない。当方からの説明がどうしても多くなる。これを機会として関心を持っていこうという意識は伺えた
- ・ 全ての学生から積極的な意見・質問が出されていた
- ・ 原子力に理解のある学生なので感触は想像内。少し設問したがもう少し返事があっても良かったと思う
- ・ 種々の問題点について議論することが出来、最後は原子力の理解をどう進めるかと

いう点で考えることができた

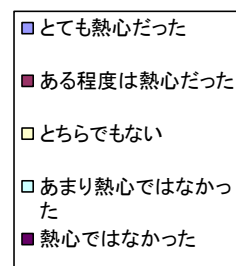
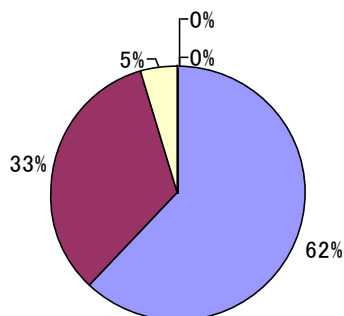
- 若い人の考え方を聞く事が出来、今後の参考にしたい
- 当方は満足したけれども学生側は満足したかは分からない。こちら側がしゃべり過ぎたきらいがある
- なるべく発言の機会が均等になるように心掛けたが、発言の少ない学生もおり、充分満足するまでには至らなかった
- テーマが決まっていたので、準備もし、また対話もスムーズに双方向にできた
- 担当した対話のテーマが学生と社会との関係が中心だったので学生としてはつつこみがとりにくかった
- テーマが買いを見つけるのに難しく、学生側の意見が必ずしも十分ではなかった

～やや不満だ～

- 学生さんの発言が少ない。もっとシニアに質問や意見を聞かせて欲しい
- 議論はできたが、話題を絞り込んだまとまった話とならなかった。時間不足
- 時間が少なかった。学生がテーマをよく理解していなかった

(2) 学生は熱意を持って対話に参加していましたか？

- ・ とても熱心だった …13
- ・ ある程度は熱心だった …7
- ・ どちらでもない …1
- ・ あまり熱心ではなかった…0
- ・ 熱心ではなかった …0



[コメント]

～とても熱心だった～

- ・ テーマについての自分の考え疑問を述べたので対話しやすかった。
- ・ それぞれ真剣に対応しようという姿勢が伺えた
- ・ 皆それぞれの意見を持っており、それぞれに熱心さを感じた
- ・ 対話を通してかなりコミュニケーションできたと思う
- ・

～ある程度熱心だった～

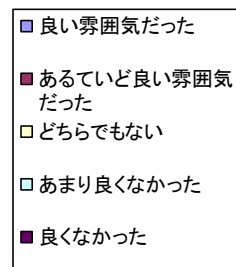
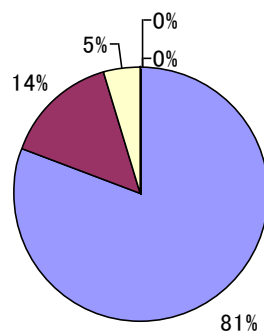
- ・ 個々に差があった
- ・ もっと積極的に自分の意見、疑問をシニアにぶつける必要がある
- ・ テーマを限ったせいもあり、関心があったとみえる
- ・ 聞くことは非常に熱心であったが、もう少し自分から話しをしたら良い
- ・ 昨年経験した人もいて、ある程度熱心に対話できた

～どちらでもない～

- ・ 熱意はあっても年代差、個人差(個性)から伝わりにくかった

(3) 対話の会場の雰囲気はいかがでしたか？

- ・ 良い雰囲気だった …17
- ・ ある程度良い雰囲気だった…3
- ・ どちらでもない …1
- ・ あまり良くなかった …0
- ・ 良くなかった …0



[コメント]

～良い雰囲気だった～

- ・ 皆さん、硬さも無くあまり緊張しない雰囲気であった
- ・ これまでの経験を活かし、良い会場アレンジであったと思う(大講堂一発表が良くできた。対話のスペース等良かった)
- ・ 会話によく溶け込んでいたと思う
- ・ 自由に話し合える雰囲気だった

～ある程度良い雰囲気だった～

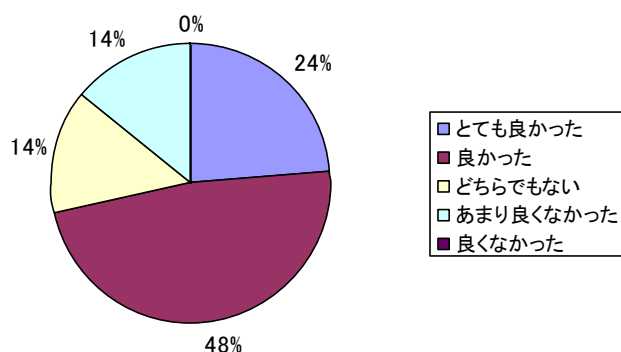
- ・ ちょっと狭かったと思いますが良いと思います

～どちらでもない～

- ・ どちらかといえば、シニア側の話が多かった

(4) あらかじめテーマを決めたことによる対話の窮屈さは感じませんでしたか？

- ・ とても良かった …5
- ・ 良かった …10
- ・ どちらでもない …3
- ・ あまり良くなかった…3
- ・ 良くなかった …0



[コメント]

～とても良かった～

- ・ 難しい問題であったが、社会との接点を考えることは貴重な経験だと思う。回答を一緒に考えるという点でも良い企画だった

～良かった～

- ・ テーマ以上の話題にも話が及び窮屈さは感じられなかった
- ・ テーマを中心にスタートしたが、それに限定することなく広く話し合えた。最後にはそれらがテーマに結びつくことを理解してもらうことが出来た。
- ・ テーマに関連し自由に話題を発展させていったので窮屈さは感じなかった。テーマをきめることは良いことだと思う。
- ・ あまり学生側にこのテーマを選んで、何が何でも答えを引き出そうという程の意志は無かった
- ・ 特定テーマだけ拘るのは良くないが、話の切穂としてこれから入っていくのは良い
- ・ 議論が発散しないので良い
- ・ 良いが難しいテーマだった

～どちらでもない～

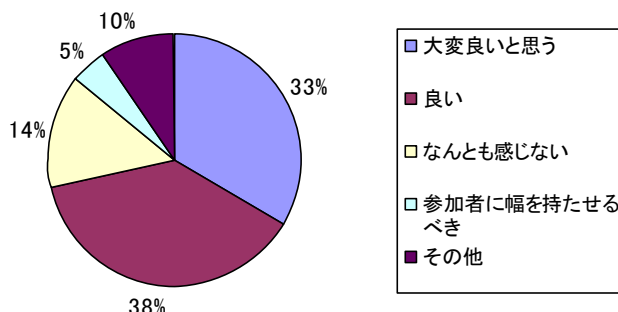
- ・ 学生たちがテーマについて事前に深いところまで考えていなかったのが、それが討論を進める上で良かったのかどうか…
- ・ 自由な対話となり、テーマをまとめる時に苦労していた

～あまり良くなかった～

- ・ 日本人全体の危機意識の改革というテーマは学生には難すぎた

(5) 本学での対話は他会場と比較して原子力系で比較的高学年の学生が中心になって参加していますが、そのことについて何か感じますか？

- ・ 大変良いと思う …7
- ・ よい …8
- ・ なんとも感じない …3
- ・ 参加者に幅を持たせるべき…1
- ・ その他（空欄記入） …2



〔コメント〕

～大変良い～

- ・ 個々の学生が学校で学んだ原子力に関連する学問をベースに社会で活躍したいとの意欲が感じられた

～良い～

- ・ 社会と現実に向き合う世代なので、このような場は直接的に有効だと思います
- ・ 話の進めた方がスムーズ。しかし、ユニークな話があまり出来ないのが一寸物足りなかった
- ・ M2 で就職の決まっており原子力以外に決定している人もいたが、原子力の理解を広げたいとの意志表示があり良かった。だが皆さん原子力の様々な面での知識が十分でないと感じた
- ・ 我が班はドクター、マスター、学部生とバラエティに富んでいた
- ・ 各大学特有の事情があり、原子力系だけに限定することで深く原子力の話が出来るのは良いと思う

～参加者に幅を持たせるべき～

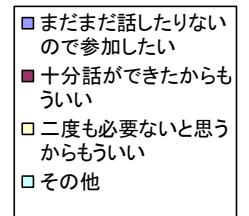
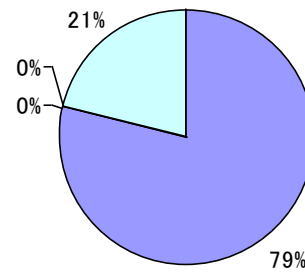
- ・ 組分けをどうするかは別として(ある程度レベルが同じ方が良いか?)出来る限り広く希望者をあつめて欲しい

～その他～

- ・ 対象者に応じ、当方も合わせるつもりである。バラエティが多少ある事を否定する理由はない

(6) 来年度、東北大でこの対話の会があった際に参加したいとおもいますか？

- ・ まだまだ話したりないので参加したい…15
- ・ 十分話ができたらもういい …0
- ・ 二度も必要ないと思うからもういい …0
- ・ その他（空欄に記入） …4



〔その他〕

- ・ 良い試みだと思うので、協力したい
- ・ 学生はどんどん入れ替わるので、継続的に実施されると良いと思います
- ・ もし機会があればまた参加したい
- ・ 多くの人に“対話に参加する”機会を与えたい

(7) 本企画を通して全体の感想や学生への意見などがあればご自由にお書き下さい？

- ・ 各グループの学生側のリーダーが主導的に進行させるように事前に指導して下さい
- ・ 論理的な問題点の指摘とその解決が社会を前進させるために必要になるので、それができる情報や知識を取得することを学生に期待する
- ・ 学生たちのまじめな姿勢が良かった。将来を期待したい。来年も継続して開催されるべきと考える。出来たら今年参加した学生は来年も参加してしかるべき
- ・ 原子力に関係しない学生の参加があっても良いのではないのでしょうか
- ・ 東北大は学年ごとのグループ分けでもいいのではないかと。例えば学部生、修士課程、博士課程に分ける。
- ・ 事前準備も十分になされ拡販のテーマ配分などもよくできており感心しました。ただ、学生の皆さんがおとなしいことが少し残念でした。発表に対しても学生さんからの質問が少なかったのは残念です。出来れば学生さん同士の積極的な意見交換があれば良かったと思います
- ・ 学生さん達は実社会での動き思想等々に疎い(当たり前)なので、知識の伝達以上に物の見方、自らの行動の原理などを伝えて彼等の成長の“こやし”となれば幸いと考えています
- ・ 意見交換すべきことは広範囲にわたるが、時間の制約のため必ずしも十分でない。今後はすこしでも工夫してより広い意見交換に努めたい
- ・ 本企画は原子力エネルギーの開発において、大変良い企画と思われる。しかし、内容については更に進化していくよう検討を重ねる必要がある。学生の方々は私が予想した以上に多くのことを学んでくれた
- ・ エネルギー、環境の厳しい現状をもっと良く知って欲しい
- ・ できたら皆さんで E-mail 討論会を恒常的に進めてみてはいかがでしょうか。必要に応じて応援します
- ・ 学生側がもう少し積極的に発言して貰えるとシニア側として話を継ぎ易いと感じた
- ・ せっかくの機会ですから、学生側がシニアに質問とか意見をもっと出して貰いたい
- ・ 原子力専門(技術系)以外の学生も参加しており、幅広い意見交換が出来て有意義であった
- ・ 昨年に比べて少人数(学生数 昨年 8 名、今年 5 名)なのでよりよい対話になったと思う。ただ、どんなことでも構わないので、自分から積極的に質問していくという姿勢が大切である。
- ・ 今年の対話結果の発表は昨年より大分上手になり、良い対話であったことを伺った

- 学生さんから何を聞いてよいのか戸惑いがあるのを感じて(事前アンケートはある程度役に立ったが…)
- 原子力関係の学科以外の分野の方にも議論に加わって頂ければ更に良いと思います(交流の場を作ってどうでしょうか?)
- 対話の積み重ねの成果が現れるように

添付資料 4

事後アンケート集計 (学生)

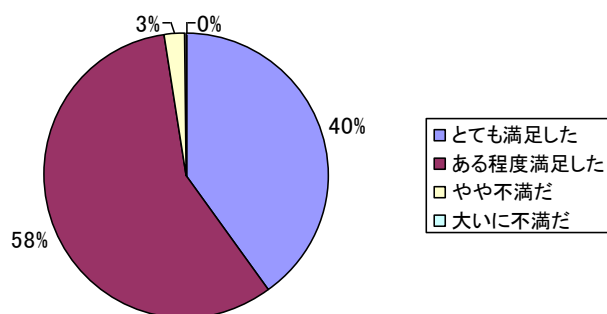
総回答数：41 (参加者 48 名だったのでアンケート回収率は 85.42%)

対象：対話に参加した学生 48 名 (東北大学 47、武蔵工業大学 1 名(学生連絡会会員))

- 博士課程 5 名、修士課程 30 名、学部生(4 年生)13 名 -

(1) 講演の内容は満足いくものでしたか？その理由は？

- ・ とても満足した …16
- ・ ある程度満足した…23
- ・ やや不満だ …1
- ・ 大いに不満だ …0



〔理由〕

～とても満足した～

- ・ 専門知識がなくても、非常に分かりやすかった
- ・ とても興味深い内容だったので
- ・ エネルギー問題を正しく捉えられるようになった
- ・ エネルギー問題は今や世界的なものだということが理解できた
- ・ 原子力に関わる情勢を知れたから
- ・ パラダイムシフトという事に対する、その重要性や危機感を持たなければならないことを学んだ

～ある程度満足した～

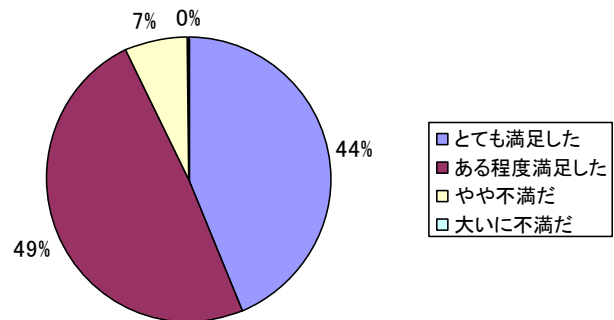
- ・ 現在のエネルギー事情についてある程度わかったから
- ・ 色々な話を聞いた
- ・ 原子力の現状について学ぶことができた
- ・ 各国の原子力に対する姿勢(スタンス)がわかってよかった
- ・ もう少し経済的な視点の話が欲しかった
- ・ 大人の意見を聞いた。企業の姿が分かった

～やや不満だ～

- ・ 何度も聞いたことのある話が多かった

(2) 対話の内容は満足いくものでしたか？その理由は？

- ・ とても満足した …18
- ・ ある程度満足した…20
- ・ ややふまんだ …3
- ・ 大いに不満だ …0



〔理由〕

～とても満足した～

- ・ シニアの方々のお話は体験を交えてのお話だったので、非常に説得力のあるものでした
- ・ 貴重な意見を頂くことができた
- ・ テーマの枠を超えて色々な話を聞いた
- ・ 社会や企業が求めることや、学生として勉強すべきことを聞くことが出来た
- ・ 原子力発電の現場を知る方々の話は非常に興味深かった
- ・ なかなか聞くことができない深い話など大変参考になった
- ・ 研究機関の話を聞いて良かった
- ・ 企業の実際の話の色々と聞いたから
- ・ 自分の研究にアドバイスを頂けたから
- ・ 話し易い雰囲気を作って頂き、様々なことを聞くことが出来た

～ある程度満足した～

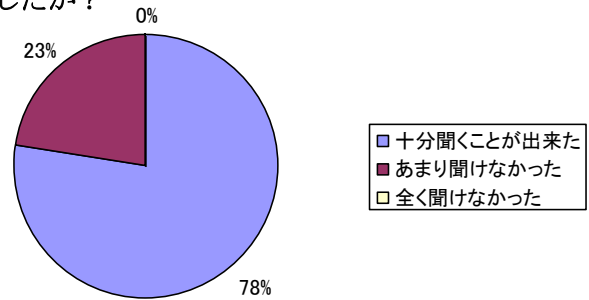
- ・ 新たな知識をえられたのは良かったが、自分の知識が足りずついていけないところがあった
- ・ テーマが興味を少しズレていた
- ・ 自分も意見を言えたから
- ・ あまり周りが意見を述べなかつたので少し気まずかつた
- ・ 新しい知識や古い歴史などを教授いただきながら自分の意見を言うことが出来た。しかし、対等な議論ができたとは思えないので、そこが課題だと思う。
- ・ 自分の聞きたい事を教えて頂くことができた

～やや不満だ～

- ・ 部屋の大きさにたいして、中の人数がとても多く話しがほとんど聞き取れなかつたため
- ・ 事前に聞きたいと思っていたことを聞けなかつたから
- ・ テーマに沿った話があまり出来なかつた

(3) 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？

- ・ 十分聞くことができた…31
- ・ あまり聞けなかった …9
- ・ 全く聞けなかった …0

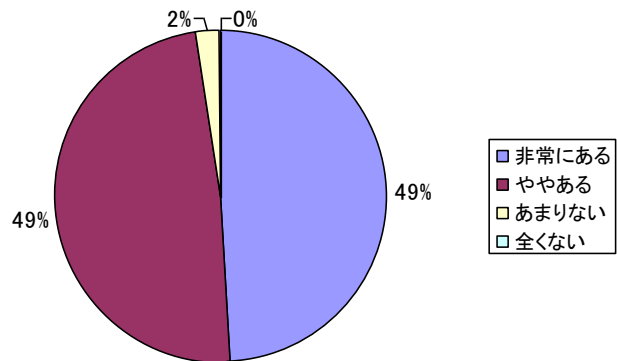


(4) 今回の対話で得られたことは何ですか？

- ・ 対話の内容には正直斬新なものはないが、シニアの体験談は面白かった
- ・ 日本の現状やそれを踏まえての未来への危機感
- ・ やはり重要なのはコミュニケーション能力ということ
- ・ 今まで知らなかった放射線利用に関する知識
- ・ テーマに沿ったあつい議論が出来た
- ・ シニアの方の貴重な話を聞いてよかった
- ・ あと少しの学生生活の中で何をすべきかについてイメージを持てた
- ・ エネルギーの意識改革については長い時間がかかる
- ・ 議論を時間内に方向づけて結論に持っていく事の難しさ
- ・ 放射線や原子力の正しい知識を議論等を行って一般に広めることが大切
- ・ 反対派との討論・説明の難しさ
- ・ 社会人の心構え
- ・ 海外とのやり取りにおいて、重要なのは契約の遵守であることがわかった
- ・ 原子力報道のありかたについてわかった
- ・ 国、研究所、メーカーの役割がはっきりした
- ・ 日本の原子力技術の高さ
- ・ ビジョンに基づくコミュニティーが必要であること
- ・ 現場で働いている人の意見を知った
- ・ これからの就職活動について役立つ情報を得られた
- ・ 企業がどのような人材を欲しがることがわかった
- ・ 原子燃料サイクルに対する理解と問題点を明確にできたこと
- ・ 課題だと思っていた事が実は技術レベルでは解決しているということを知ることが出来た
- ・ 原子力に関係する仕事は自分の今までの認識より大分広いことを知ることが出来た
- ・ 日本は原子力の先進国なのだという誇り

(5) 「学生とシニアの対話」の必要性についてどのように感じますか？その理由は？

- ・ 非常にある …20
- ・ ややある …20
- ・ あまりない …1
- ・ 全くない …0



〔理由〕

～非常にある～

- ・ 同年代の人間との対話だけでは、知識が不十分であると思うから
- ・ シニアの方々の話を聞くのが好きだから
- ・ 大学の研究と企業の研究の違いなどを知ることが出来た(経済性、実用性)
- ・ 今回のような議論をする場が普段あまりないから
- ・ 経験やあまり表に出ていない話を聞くことができるから
- ・ 多くの経験をつんできた方々と対話することは得られるものが多く重要と思う
- ・ 長年の経験やこれから必要になってくることを聞くことができるから
- ・ シニアはもちろん他の研究室の学生と関わる良い機会だから
- ・ このような場でないと聞けないこともあるから
- ・ シニアの思いを学生に伝える絶好の機会だから
- ・ 歴史などを学べ、幅広い考え方を身につけることができるから
- ・ 自分の意見を目上の人に対して述べる機会が得られるから

～ややある～

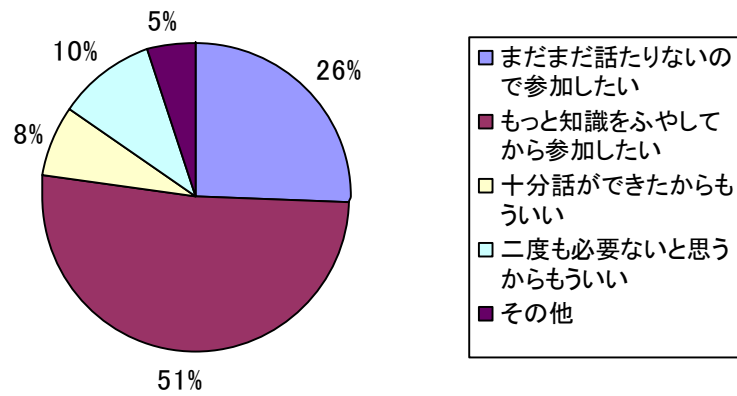
- ・ 実際に仕事を終えた人の話が聞けるのは嬉しいが、今がどうなのかというところがいまいち明確にならないため
- ・ 必要だと思うが、原子力を学んでいない学生こそ積極的に対話に参加するべきだと思う
- ・ 普段シニアと学生が話すことはあまり無いから
- ・ 世代間の認識差の解消のため
- ・ 原子力に対する考えを再確認できたから
- ・ 知識を若い人に伝える良い機会であるが、しばしば原子力反対派や朝日新聞に対する不毛なバッシングに花が咲いて残念だった
- ・ 2回も3回も参加する必要はないが、大学の先生とは別の視点の話を聞けるから

～あまりない～

- ・ あまり意味が無いように感じる

(6) 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

- ・ まだまだ話たりないので参加したい …10
- ・ もっと知識を増やしてから参加したい…20
- ・ 十分話ができたらもういい …3
- ・ 二度も必要ないと思うからもういい …4
- ・ その他（空欄記入） …2

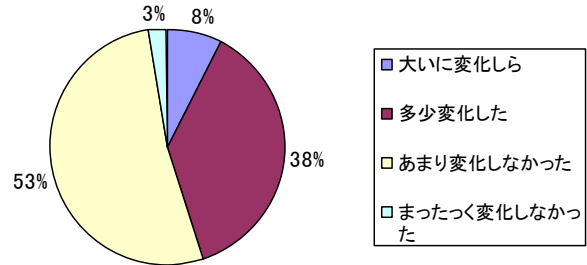


[その他]

- ・ 自分達(原子力に関する教育を受けている学生)ではなく、今まで原子力を学んでいない方々が参加するべき
- ・ 今回で2回も参加したのもう十分

(7) エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか？その理由は？

- ・ 大いに变化した …3
- ・ 多少变化した …15
- ・ あまり变化しなかった …21
- ・ まったく变化しなかった…1



〔理由〕

～大いに变化した～

- ・ 自分の予想とは裏腹にウランの枯渇予想時期が早いことが分かったから
- ・ 自給率4%ということに危機感を持つべきだと感じた

～多少变化した～

- ・ 更に新たな知識を少し得たから
- ・ 秋元さんの試料が興味深く新鮮だった
- ・ この学科に在籍しながらも、多少甘い考えを持っていることを再認識させられたから

～あまり变化しなかった～

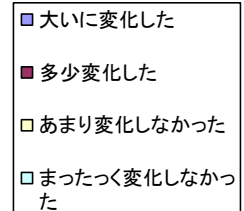
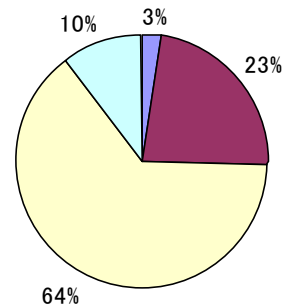
- ・ 以前から危機意識を持っていたから(興味を持って調べていた)
- ・ 昨年の内容とあまり変化がなかったから
- ・ あまり積極的に話せなかったから

～まったく变化しなかった～

- ・ 既知のことだったから

(8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか？その理由は？

- ・ 大いに变化した …1
- ・ 多少变化した …9
- ・ あまり变化しなかった …25
- ・ まったく变化しなかった…4



〔理由〕

～多少变化した～

- ・ 長年にわたって原子力に関わってこられた人のお話が聞けたから
- ・ プルサーマルに対する考え方、処分に対する考え方が変わった
- ・ 原子力は自分が想像していたより大分広いものであることを知った

～あまり变化しなかった～

- ・ 原子力を専門に学んでいること、また原子力は国民から批判にあっていることなども知っていたから
- ・ イメージ通りだったから(自分の知識の範疇を超えなかったから)
- ・ 今まで、原子力は必要になってくるものだと思っていたから
- ・ もともと悪いイメージがそれほど無かったから

～まったく变化しなかった～

- ・ 原子力に関する学科に在籍しているから
- ・ 既知の内容だったから

(9) 原子力に対する関心の低い10代、20代の若年層に対する原子力広報活動はどんな方法が良いと思いますか？

- ・ 身近なところからの話し合い
- ・ 低学年の遠足等(社会科見学)による原子力関係施設や原発の見学会
- ・ 出前授業などの教育的なもの
- ・ 電気をつけてはいけない時間や日などを設けて危機感を与える
- ・ 治療などの応用例や様々な取り組みについて公表していく
- ・ 積極的なテレビCMやインターネットを利用による宣伝活動
- ・ 地球温暖化と絡めた原子力推進
- ・ ヨーロッパのサッカーチームのスポンサーになる
- ・ マスコミに専門家が必要
- ・ 広報というより、10代の頃から教育としてやるべき
- ・ 学部生に対する一般教養の授業に組み込む
- ・ 学校に行って原子力についてディベートさせる
- ・ 特に文系学生に対しての原子力関係についての議論の場を設ける
- ・ 原子力に興味を持った人が、効率良く知識を得られるような方法を掲示すること
- ・ 義務教育。具体的にはRI講習会を総員に対して行う
- ・ 「エネルギーを考える」という科目を作ってしまう、受験科目に据える
- ・ 難しいと思うが、教育者が原子力に対しての知識を深めるべきだ
- ・ 基本的に必要な情報のみを与える(一般的な話だけをしておく)

(10) 本企画を通して全体の感想・意見などがあれば自由に書いて下さい。

- ・ 放射線・原子力等といままで関わりのなかった人達にこのような機会を与えるべき
- ・ もう少しじっくり話せる環境が欲しかった。内気だから自分からは話しかけられないのでより少人数での対話を希望
- ・ シニアの方の貴重な話を聞いた良かったと思う
- ・ 大学だけでは聞くことが出来ないような話を聞くことが出来たので、非常にためになった
- ・ 非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。シニアの皆様有難うございます。
- ・ 話をまとめて発表するまでには時間が短いと感じました。丸一日くらいかけても良いかと思えます。
- ・ 内輪での議論による知識の増加に留めておくのはもったいない
- ・ シニアの方々から会社生活におけるアドバイスをもらって頂きたかった
- ・ テーマが決まっていた議論しやすかったが、最後の発表が難しかった
- ・ 一人一つは質問を考えてくるようにすると良い
- ・ グループワークの時間を長くしたほうが良いと思う(講演だけでは伝わらないことがあるし、少人数なので質問しやすい)
- ・ 来年は話し合いをリードする立場になれるようにしたい
- ・ 同じ原子力系の学生といえども、他の研究室がおこなっていることを知らなかったりするので、横のつながりをするのも出来たので良かった
- ・ 将来の進路を考えるうえで非常に勉強になった。
- ・ メーカーが風評被害を懸念して、放射線利用を公表しないことを知った

添付資料 5

シニア感想文

出席したシニアの感想文を提出された全員の文章を掲載する。

(掲載順はあいうえお順とした。)

● 荒井利治

今回の対話は東北大といういろいろな意味で纏まった大学との2回目の対話であったことから、今までのものとはまた違った感想を持ちました。

1. 会場のアレンジが大講堂での講演、学生の発表、講評と、別室(2部屋)での対話と機能別の分け方であったため非常にスマートで、聞きやすかった。

また、まとめの学生川村君の誠実かつ的確な進行で、万事うまく運営されたことに敬意を表する。

2. 対話のテーマは事前に与えられていたが、就職、それに対して求められる学生像といった身近なもの、世界、日本のエネルギー、原子力問題という大きなものに大別されるが、前者では当然学生は受身で聞き役に回り、自らの意見を積極的に出しにくいように思われた。(私のグループはこのテーマであった。)

後者では、若い人なりにシニアから見て乱暴と思える議論が出てしかるべきだが、後で他のグループの話を知ると、全体にシニアの話をよくきき、理解されているが積極的にアイデアを出すことが少ないようである。

3. これは口下手、つつましさという東北の人の特質もあろうが、昔の旧制高校生や大学紛争時の学生のように世界、国家という視点で物事を見かつ考えることが現在の学生にとって二義的になっているからと思える。

まさに日本全体の危機感の薄さ、平和ボケの中で育った世代としては当たり前で、その中で原子力を選んだ彼らはむしろ(先生、先輩の御指導により)特例かもしれない。

4. シニアの役割は彼らが自ら考えるヒントを如何に提供するかで、私は自分の経験談だけでなく何か出せないかと考え、読書の奨めのリスト(「14歳からの人生の教科書」文春新年号より)を配っている。

● 飯島 進

学生たちは、私たちの説明から、私が考えている以上に多くのことを汲み取っており、そのことが今回の会で最も新鮮な驚きでした。学生達の報告については、もう少し時間をとり、議論する時間があると良いと思いました。また、議論を深めるために、会の前後にインターネットを利用して、継続的に議論するシステムができると良いかと思います。機会がありましたら、次回また参加したいと考えております

● 石井正則

私は、「原子力反対派に対しどのようにアプローチ・説得していくべきか」というグループを担当した。

このテーマは、特に絶対的な回答のないテーマである。地道に、誠実に、判り易く説明

することにつける。このためには自らが様々な見方を含めてきちんと理解し、信念を持つことがまず必要である。そのうえで、説明する人が信頼されているかどうかがかぎとなる。

このことは、反対派の説得だけではなく、企業や社会における活動すべてについていえることで、学生の今後の活動、特にリーダーとしての活動にも共通なものがある。その意味で、社会に出て活躍する際の参考になったら幸いである。

今回の対話では、そういったことを一緒に考えるという姿勢で臨んだ。ただ、シニアがこれまで社会でとってきた姿勢を伝えたいという意図もあり、ややもすればシニアの発言が多くなる傾向となった。学生側の発言が活発になるには、ウォーミングアップの時間が必要なかもしれない。然しながら最後は学生にしっかり締めくくってもらえたので、学生のためにも良い経験になったと思う。

主な議論のテーマは下記のようなものであった。

- * ややもすれば情緒的反対論に対しては、論理的、定性的に丁寧に説明する必要がある。
- * しかしながら、そのような理屈を理解してもらえない方々もいる。そのような場合には、説明する人が信用されているかどうかかぎとなる。(東北電力は女川で時間をかけ地道に話し合いをしてきた。)
- * どうやっても反対の人はいるが、そう多くはない。これらの人を説得するのは無駄。
- * 小中高では、原子力や放射線に関する教育がされていない。教育プログラムに含める必要がある。
- * 小学生や中学生に原子力発電所見学を見学させるとよいのではないか。家庭で子供が安全だったと話せば、親の心配もなくなろう。

● 石井陽一郎

東北大での SNW ははじめてです。昔「広瀬川流れる岸边、思い出は帰らず・・・」の青葉城恋歌につられて行って以来です。

「原子力報道の在り方」が我々のメインテーマで学生もいちおうの関心をもってのぞんできた。原子力の他産業にくらべ大きく違うように見えることの一つに「放射線」がある。本件ウリミバエ駆除、タネナシ西瓜、重粒子線の医学への応用一効果実績はある程度知っている人もいたが、いま一つはつきりしなかった。放射能が漏れたのはウン億分の一といってもシーベルトとかベクレルはなじみにくい感じをみな持っているようだった。柏崎刈羽原発についてのマスコミ報道にはかなり冷静にうけとめていた、むしろ発電所はよくやっていたとの感触をもっていた。さすが原子力を学んでいるだけのことはあると感じた。原子力・エネルギー教育を初等、中等、高等と系統的にまなぶべし、との意見一もちろん広報の原子力リテラシーに関連する一これについて聞いたところ、原子力施設見学、実験をあげていたが、見学などは興味をもって効果をあげるにはよい方法であると思った。我班にもそういった体験を話す人がいた。政府もエネルギー教育に動きを見せているが、時間的制約はあるのでこういったことに力をいれるべきだ。

配布資料で東北原懇の「ひろば」なる小冊子、石川原技協理事長の記事、秋元勇巳原文振

理事長の「気候変動と原子力」{竹内さん推奨}はたいへんよませる。昼の会もそうだが後の懇談会での交流も楽しくまた啓発された。

川村幹事からの礼状にこれからは原子力が軸だが産業構造が変わる可能性大、ある意味では面白い世の中になる側面もある。ご健闘を期待する旨返信した。

● 伊藤 睦

最後に講評の指名を受けて言い尽くせなかった分を感想で補わせていただきたい。

まず、学生幹事の川村君そしてそのご指導された吉田先生、岩崎先生他これに協力して頂いた東北原懇や東北電力の皆さんの準備と心遣いで最後の懇親会まで行き届いた運営が成されたことに敬意を表すると共に感謝します。

私としては東北では初めての対話会であった

昨年の報告書には学生77名シニア22名とかなりの規模で実施されて、対話では{11グループのうち、8グループが「原子力の受容性の問題としての、放射線に対する社会の偏見」があり、その問題解決には「初等中等教育に問題が有ること」を指摘していた。彼らの育ってきた教育環境の問題点を指摘したものであり、共通の話題として取り上げられやすかったこともあるが、大学専攻として放射線、原子力を選択したことへの一抹の不安感を示しているとも言える。)とシニアの感想が記載されていた。

今回は、我々のグループのテーマ「学生は社会に出るにあたってどのような力を身につけるべきか？」であった。このテーマに見られるように、また他のグループ発表でも、今回の対話会は原子力の暗い面や後ろ向きの話が消えて、むしろ、自分達の役目を認識し、それを果たす準備の方に関心が移っているように思えた。今年は、他の大学の対話会でもほぼそのような雰囲気を感じた。

この様な変化は我々が対話会を始めた3年前の学生さんの関心事が「原子力の未来に明るさが見えず今後どうなるかということ」であったことを思うと大きな変化である。

最後の発表でも、自分達で原子力を盛り上げて行こうという前向きな決意表明的な発表が多くあり、大変心強く思えた。

我々の話は、自分たちの経験をベースに、いろいろな問題・課題を提示しどう対処すべきかを話し伝える「語り部」的な活動である。決して、「横丁のご隠居さんの小言」や現役の施政を正す「水戸黄門」的な活動でもない。

今回の対話会も、各グループの発表の様に、我々のとの対話を通じて感じたことが、これから社会人として自立した行動に役立ち、原子力の活性化そして日本のエネルギー自立に繋がることを期待したい。

その中で多少気になったことは、最近の対話では、我々の話に学生さんからの異論や反論が少なく、対話が一方的になることが多いことである。適当な討論がなければ、本当に我々の話しを理解して納得したのかどうか摘み難い。もう少し、討論(デベート)的な対話会を望むが、時間的に無理ならグループの発表の場で質疑応答を活発にすることが必要ではないか。

● 岩瀬 敏彦

当日は、昨年に続き、2回目の対話ということで、大いに盛り上がり、参加の学生の皆様の力強い一層のがんばりの姿勢を強く感じました。

1. グループ対話について

4班での対話は“海外の原子力情勢について”のテーマのもと、シニアは、金氏幹事と小生、学生は、D1 長谷川君を世話人に、M2 山川君、M1 松本君、佐藤君、梅津君の5名で、時間の限り、いろいろと意見交換をした。

対話のきっかけとしてシニアより、現在世界規模での原子力界の大変革、日本の原発メーカを中心としたビジネス展開が開かれる可能性、また、昨今のエネルギー危機、石油資源の枯渇の恐れ、地球温暖化を抑制するために、世界規模での原発設置の機運、具体化の状況を資料をもとに、対話テーマの基調の話をし、対話に入った。対話では、日本が世界のエネルギー供給の柱たる原子力発電に関する技術の伝承と普及、国際協力対象国の関係法令の理解と遵守、それを実効あらしめるため、チームワーク、コミュニケーションが大切であり、国際レベルでの実践には、語学力ー英語力を身につけるべきことが、学生として自分の専攻分野の技術の修得にあわせ重要との共感に到達した。すなわち、学生の方々の前向き、積極的な姿勢を強く感じた次第である。

2. 全般

対話テーマをもとに議論された各グループでの対話総括報告は、それぞれの学生が学ぶ専門技術を深めるとともに、周囲のことにも理解ができる教養を可能な限り身につける、ともすると表面的になりがちなメディア原子力の報道に対して、本筋を見抜く力を付ける、それは正しい判断が下せる理解能力を育てる、そのためには、小中高時代から科学、エネルギー、環境、原子力に正しい理解を持たせる教育システムを整備することの必要なこと、など学生としてごく自然でかつ前向きの意識をもっていることが改めて強く認識され、対話の継続による成果が示されてきたと実感した次第である。SNWのキャンペーンがステップバイステップで、目標へ向かっての前進が認められ、継続は力なりということが評価できると思う次第。

● 岡部 健悦

対話の準備に当たられた学生幹事、シニア幹事、石井先生、岩崎先生、それから参加された学生諸君、シニアの方々に敬意を表します。

私は、東北大学原子核工学科の卒業生であり、少し先輩という形で今回参加させていただきましたが、私自身非常に勉強になりました。

グループテーマは、「日本人全体のエネルギー危機意識を変えるためにはどうすべきか？学生はどうすればよいのか？」でしたが、ご一緒させていただいた齋藤先生の用意された資料を見て討論をし、学生個々人がどのようにエネルギー危機を捉えているのかを聴くうちに、エネルギー問題は非常に幅広く難しいものであることを再認識させられました。学生たちも「日本のエネルギー危機」がなんであるかを深く考えることにより、世間一般で言われているような画一的なものの見方ではなく、情報アンテナを高く持つ必要性を感じ取り、自分の意見を持つとともに、これからの自分の進む道が少し分かったのではないのでしょうか。

また、学生たちは、あまり原子力や将来の仕事に対しての情報やコミュニケーションの機会が無いように感じられました。このためシニアと学生の対話が今後ますます重要になってくるとの意を強くしました。

● 金氏 顕

1. 前は学生 70 名以上となりシニアの人数不足 1 グループが学生 7~8 人にシニア 2 人となり発言しない学生がいたが、今回は学生 5 人にシニア 2 人となって、しかもテーマが決まっていた活発な対話になったと思います。なお、リピーターの学生がいたとのことですが、彼らの満足度はどうだったのか、気になるところです。
2. 学生の発表で「家族や友人、一般市民や小中高生徒にエネルギーや原子力の話し、教育や講演をしたい」と決意表明をした学生がいましたが、大変嬉しいことです。次回は是非その報告と感想を聞きたいですね。
3. 全国の学生との対話の中で、大学側（先生）および電力と原懇の支援が最も積極的にやっていた対話です。ありがたいですね。
4. 各グループの学生発表で私から質問を 1~2 求めてはどうですか、と提案しましたが、結構良かったのではないかと思います。今後必ず質問時間を設けるようマニュアルを改訂していただきたいですね。

● 川村一二三

この度、標記の対話に原子力OBとして参加させていただき短い時間でしたが大学生の皆さんと率直な対話が出来大変有意義でした。関係者の皆さんに感謝申し上げます。

対話を通して感じた事は次の 2 点です。

- 1) 多くの学生が原子力活動における電力等当事者の活動の取り組みに物足り無さを感じているようでした。特にトラブル時の対応等。
わが国の原子力活動の仕組み等について説明しましたが理解は難しい様でした。私共の基調講演の内容にこの点の説明を追加してはと思います。
- 2) 私共のテーマは「原子力反対派に対してどのようにアプローチ、説得していくべきか」と言うものですが、学生には難しいテーマの様でしたが、学生の中に原子力施設出身の人と広島大学出身の人がおられまして、その地域住民の皆さんの原子力に対する感想を伺うことが出来ました。その中で感じた事は、原子力アレルギーを和らげる為には原子力を正しく理解してもらふ事が肝要だという事です。

その為には、地域の皆さんとのコミュニケーションと信頼関係（共生）が大事ですし、加えて原子力の様々な事象を正しく判断できる知識を持ってもらえるような教育の充実等が重要であるという事が対話の結論になりました。

このような事を将来原子力のリーダーとなるべき学生と対話できた事は大変有意義な事と思いました。

● 齋藤 伸三

何時もながら、この対話の準備に当られた学生幹事、シニア幹事の方の大変なご苦労に

よりスケジュール通り円滑に進められたことに敬意を表します。

今回、小生に割り当てられたグループのテーマが「日本人全体のエネルギー危機意識を変えるためにはどうするべきか？ 学生はどうすればよいのか？」と言うのを 2, 3 日前に知らされ、国民の意識改革とは大それた課題設定であり、どのような意識でこの課題を考え、何を訴えたいのか、解は持っているのか、大変不安になり、自分なりに分析した 2 ページものを用意して臨んだ。そして、資料を出す前に一人ずつ意見を聞いてみた。総じて、量子エネルギー工学を専攻することになってからエネルギー問題に関心を持つようになったと言うことで、それは結構なことであるが、シニアとデベイトを戦わせようとのレベルではなかった。本当は、その位の元気を期待したいところであったが、終了後、リーダーの川村悠さんから「あのテーマがあんなに難しくそして幅広くバランスをとって議論をしていかなければならないものだと思います、かなり短絡的な考え方をしており、議論できてうれしく感じました。」との丁寧なるメールをいただき、非常に柔軟性のある感性を持っていることに明るい希望を持った次第である。

今回、10のグループ中同じテーマで2グループが議論したものが2つあったが、グループ対話の結果発表では、同テーマのものは連続して発表した方が討論も弾むと思う。また、毎年実施するならば、それまでの対話を総括し、時代の動きにも配慮し、その年のテーマを設定する方向で考えて戴けたらと思う。

● 菅原剛彦

参加者も多く、大変盛り上がったいい対話の時間だったと思います。

益田様の貴重講演は学生さんから見れば随分とエネルギーに関して幅広い知見を述べられたと感じたのではないかと思います。皆さん熱心に聴いておられたようでした。

グループ対話ではシニアから随時適切な質問やコメントが出てよかったとおもいます。学生さんからそれなりに発言がありましたが、自分の親よりもはるか年上のシニアの皆さんに対してナニをドウ聞いたらいいのか戸惑いがあったように感じました。

対話で出てきた色々な学生さんからの質問やコメント、それに対するシニアの答えやコメントを段々と集積して、それを評価し体系付けして行けば、原子力定着のための論文になると思いました。

● 宅間正夫

エネルギーや原子力を学ぼうとする学生さんたちへ、益田さんが、実業の場のご経験から具体性に富むエネルギーの重要性を説かれ、「技術の発展そのものが、人口増加と経済発展、エネルギー消費の急増、およびその結果として熱エネルギー利用にともなう非可逆的な環境劣化を招いている」ということを学生さんたちに認識させ、技術に携わる者としての自覚を促すのに大きな効果があった、と感じており、適切な優れたプレゼンだったと思います。

各班の発表は短時間のまとめでしたがさすがにポイントをつかんだ優れたものでした。技術者としての生き方について、フロアのシニアたちとのやりとりは見るべきものがあったと思います。「空気が読めない」最近の若者への危惧の発言がありました。これは重要

な指摘だと思います。「科学技術は理性の世界、技術者は理性に生きる、と思われがちだが実はそうではなく、理性は感性があって始めて生きる、感性がなければ大局はもちろん周囲の雰囲気・空気もつかめない、感性が鈍ければ相手の心が読めず対話が成り立たない—そうなる自分の主張の押し付けという独善に陥る」ということが一般的には言えると思います。技術者の本質にかかわるこういう討議が行われたことは、学生さんたちにとっても何らかの啓発になり、その意味で大きな収穫があった対話集会だったと思っております。

成功裏に終わった対話集会で先生方・学生さん側、およびシニア側の幹事の皆様、本当にありがとうございました。

● 竹内哲夫

参加メンバー、全般の進行、議題設定については関係各位の周到的準備に対して、満足で、厚く御礼申し上げます。

ただ1点、次回からは3Round目になるし、全体の参加学生と教授陣の厚い本校での効果のスパイラルアップを図るために以下に提言したい。

総括の学生発表にもう少し時間をかけてグループ相互間、SNW間でも議論をするようにした方がいいのではないかと？もう1時間くらいグループG別発表に時間を割く。

今、私の心配は杞憂かもしれないがKY（空気を読む）型の認識で、世渡りできればイイと言う安易な若者が多くなっている。若者は、イイ子でなくむしろ角張っても世直し、老人が跋扈した悪い伝統に一矢を放つような若者が多くいてイイと思っている。学生が飛び込む社会、会社は既に隠蔽、改竄問題で荒れた後遺症が残る雰囲気であり、New Complianceが定着しどころか、むしろ、これにむかって模索、葛藤している段階で、この中で若者はKYでは済まされず、また住めない。

この点からシニアは教える物は無く、恥を懺悔しているだけである。今回の議論で、「会社入社後は、問題を難しいと逃げずに果敢に向かう、不可能は無いとやりぬく」との発表通りであり、処世術ノウハウの伝授などは出来ない、ひたすら情熱、信念、知力を磨けとしかいぬ。

討論発表で中島拓男君が発言した真意も同じかと思うが、今後は若者がこの種の問題に対して自分の意識、判断に自走制御性、少なくとも免疫を持っていないと、世の中の進歩、改善は無い。

くどいようですが、宴席で場を省みず、マイクをかりて、この種の発言をさせて貰いましたが、川村 悠先生も直ちに同調の旨（以下メール要約添付）レスポンスされています。是非とも次回以降に生かしてゆきたいと思い、感想に付けました。

-----@@@@-----

川村先生 の竹内宛メール 引用

先日はお忙しい中、東北大学に足を運んで頂きまして誠に有難うございます。

竹内様には懇親会でご挨拶を賜ったり、本企画の開催に際して非常に興味深い内容の"秋元先生の資料"を頂いたり大変なご尽力を受けておきながら、御礼を申し上げるのが遅くなりまして誠に申し訳ございません。

対話の会では慌しい進行だったり、懇親会場が狭かったりと不便を感じた点が多々あったと思います。

特に懇親会のご挨拶のなかで竹内様のご指摘されておったように「角のある人間」の議論など、対話を通して生まれた新しいテーマに対してもっと議論する時間を割けばずっと有意義な催しになったと思ひ、次回の対話の会では是非ともその反省を踏まえてより良いものが出来ればと思います。

そんな私どもの不手際にも関わらず、シニアの皆様に誠意を持ってお付き合いして下さったことは大変嬉しかったですし、感謝の気持ちでいっぱいです。

事後アンケートを現在集計中ですが、参加した学生からも本企画に好意的な意見が多く、これも一重にシニアの皆様の幅広い見識の助けを得て議論が出来たからだと思います。

私の場合に限って言いますと、普段は実験室にこもったり、データ処理をしたりとあまり人とコミュニケーションすることに趣を置かずに日々を送ってきましたが、今回の企画では沢山の方とお話をし、色々な視点からのものの見方やシニアの先生方の人間的な豊かさ、本学の量子エネルギー専攻についても所属している学生のことも含めて改めて考える機会を得て、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

対話を通して、エネルギー問題や原子力教育の問題等様々な問題に直面していることも改めて感じましたし、この会で受けた刺激によって、自分が今まで気にも止めずに見逃してきた様々な情報にも好奇心のアンテナを向けてキャッチしていければと思います。

-----@@@@-----

● 土田 正和

昨年に続いての参加となったが、今年は学生の参加も 50 名程度となり、結果的には対話を通じて原子力に対する学生のモチベーションを高めるという点では、前回以上に効果があったのではないかと思う。何故なら 1 班ごとの学生数は 4~5 名程度であり、それに対してシニアスタッフ 2 名ということでもかなり広範囲にわたって、またキメ細かく対話することが出来たと思う。

小生たちのグループのテーマは「学生は社会に出るにあたってどのような力をつけるべきか」という普遍的な課題だっただけに、土井さんも小生もそれぞれの生きざまなども含めて変化に富んだ話しが出来たのではないかと自負している。とりわけ日立出身の土井さんは、いつも学生の採用試験に立ち会っていたという御方だけに、明快な話しぶりで学生諸君は十分納得が行ったのではないか……

期しくも土井さんと小生が一致した点は、将来のエンジニアとして先ず専門分野に精通すること、そのためにも学生時代は基礎的知識を十分積むとともに、他の分野にも関心を持ち見識を高めることが必要だ。バランス感覚も大切だが、若いうちは周囲を気にせずもっと自己主張すべきところは自己主張することが必要だ。例えて言えば、トンガッタ人間になれと……

学生諸君はどう感じたか、一人ひとりに確かめている時間がなかったが、是非個性的な人間に育ってほしいと念願する次第。

● 土井 彰

1. 多くのまじめな学生が多数集まり、気持ちよく有意義な時間を過ごすことが出来た。
2. しかしながら、われわれと同じように事前にテーマごとの所属グループが知らされていたにも拘わらず、それに対しての自分の考えや意見がほとんどまとまっておらず、対応が不十分と感じた。このテーマは自分で選んだものではないとの発言もあ

ったが、われわれは、経歴及びテーマについての簡単な資料を準備しているのに何も準備してこないは残念に感じた。

3. グループ発表を聞くと、本を見れば書いてあるようなテーマが多い。単に知識を増やすのではなく、ものの考え方をぶつけ合い、掘り下げ、その中から自分達は何を学んだか、今後何をすべきかを強調する内容になることを望みたい。

● 林勉

東北大学での対話は昨年が続いて2回目であったが今回は昨年の経験も活かされ、よりきちんとした対応が出来たように感じた。受け入れの先生方、学生幹事の事前準備のお陰であると感謝したい。今回は参加学生数も49名と多く、充実した対話が出来た。対話後の学生代表による発表も対話の内容をきちんと把握した上で、テーマに沿った纏め方をしており、また対応策についても言及している班もあり、評価したい。

先生のお話の中で本企画は学生にも大変に好評であると述べられていたが、このことは多くの学生からも聞くことが出来た。今回は昨年に引き続いてのリピーターも多く参加していたようであるが、リピーターの学生に聞いたところ、昨年も大変によかったので、今年はテーマを変えた班に入り別の視点からシニアとの対話ができ、新鮮でよかったとのことであった。学校だけでは学べない様々な観点での勉強ができ、大いに役立っているとのことであった。このようなことを考えるとわれわれの活動の意義が認められていることであり、継続して実行していくことの重要性を改めて実感した。

● 平田和也

5班 シニア：伊藤睦、平田和也

学生：D 呉艶、田中のぞみ M 菊池政寛 B 秋山久樹、原法義

対話のテーマは「学生は社会に出るにあたってどのような力を付けるべきか？」

学生との対話は、初めての経験であり、対話がスムーズに進むか心配しておりました。学生からの自己紹介、私の自己紹介では一方方向の「ごちなさ」が見られたが、伊藤さんの「原子力を学ぶ学生さんへのメッセージ」（メーカーの原子力OBの立場から）のペーパーによる、伊藤さんの自己紹介で、場の雰囲気が良くなったように感じました。

学生側からいろいろな、考え方、意見、要望等を積極的に話し、それに対して、シニアが過去の経験をベースに応える図式を考えておりました。

しかし、テーマが一般的な事もあり、また当班の学生は、これからも数年学校に残り勉強をする人が多く、直ちに社会に出ないこともあり、学生側からの話が少なく、シニアからの質問に、学生が答え、それに対してシニアが過去の経験、原子力に対する思いを熱くしゃべるパターンが多かったように感じました。

博士課程の人が、リーダーシップを発揮して、修士・学部の後輩から意見を引き出そうとしていたが、後輩の中に、それに応えようとする気力、元気が私には伝わってこなかった。

テーマの纏めは、「コミュニケーション力」を付けることが大事である事になった。

この結論は、グループ内でコミュニケーションが十分取れた結果とは言い難いが、お互いにコミュニケーションの大事さ、難しさを理解したことは収穫であったと思います。

伊藤さんが、明確なポジションペーパーを提示したことにより、対話があるベクトル(原子力エネルギー)に向けた様に感じたが、「学生の学んでいる、考えている原子力」と「SNWの思っている原子力」には大きな差があることを痛感しました。

● 益田恭尚

学生も経験を踏み上手くアレンジされた良い会が出来たと思う。

私は「エネルギーのパラダイムシフトを迎え、我が国の役割は」という演題で基調講演をさせて頂いたが、学生幹事の川村悠君から添付の丁寧なお礼の手紙を貰い、一応学生の理解を得られたものと満足している。

対話は3班の「原子力に関わる仕事にはどういったものがあるか」というテーマであり、小形好弘君、末光洋一郎君、有川潤君、田端尚之君、全員M1の対話会であった。日立工場で実習に参加した学生もいて、原子力界にどのような仕事があるかについてもよく知っていて、その上で、それぞれの仕事に付いて実際はどのようなことをするのかという質問であった。原子力の仕事の広がり、メーカーと協力会社との関係、研究開発の進め方等にも話は及び、また仕事の種類から派生して原子力の課題等についても議論でき、それなりの理解を深めたと思う。しかし、例えばメーカーに就職したらどのような仕事がしたいと思うかといった所までは議論が進まなかったのは、未だそこまでは考えていないのか、時間の関係もあったが、ちょっと議論が不足だったかなという感じであった。

川村 悠君のお礼状

前文お許し下さい

学生とシニアの対話 in 東北の学生幹事を務めさせて頂きました川村です。
先日はお忙しい中、東北大学に足を運んで頂きまして誠に有難うございます。
御礼を申し上げるのが遅くなりまして誠に申し訳ございません。

益田様には直前になって基調講演をお願いしたり、資料をお送りして頂いたり随分とご迷惑をお掛けしました。

基調講演では日本が今直面している問題をトリレンマから始まる非常に幅広い内容に渡って私達にもわかるように非常に丁寧にまとめられていて、敬服いたしました。
特にすばらしいと思った点は所々に織り交ぜられている歴史や政治の事柄を効果的に利用してご講演成されているところで、日本国民の理解が欠けている原子力や放射線の事象について、それらを正しく怖がるという教育を施していくにはあのような分かりやすく伝える能力が必要なんだなあと痛感させられました。

対話の会では慌しい進行だったり、懇親会場が狭かったりと不便を感じた点が多々あったと思いますが、シニアの皆様は誠意を持ってお付き合い頂きまして大変嬉しかったです。事後アンケートを現在集計中ですが、参加した学生からも本企画に好意的な意見が多く、これも一重にシニアの皆様の幅広い見識の助けを得て議論が出来たからだと思えます。

私の場合に限って言いますと、普段は実験室にこもったり、データ処理をしたりとあまり人とコミュニケーションすることに趣を置かず日々を送ってききましたが、今回の企画では沢山の方とお話をし、色々な視点からのものの見方やシニアの先生方の人間的な豊かさ、本学の量子エネルギー専攻についても所属している学生のことも含めて改めて考える機会を得て、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。

対話を通して、エネルギー問題や原子力教育の問題等様々な問題に直面していることも改めて感じましたし、この会で受けた刺激によって、自分が今まで気にも止めずに見逃してきた様々な情報にも好奇心のアンテナを向けてキャッチしていければと思います。

この度は本当にどうも有難うございました。
草々

● 松永一郎

東北大学における対話は今回が2度目であり、丁度1年前に開催されている。前回は開催までに1ヶ月の余裕も無く、また学生との対話に先立ち、教員とシニアの対話も実施されるというかなり大掛かりなものであった。また学生の参加の数も、準備期間が短かったにもかかわらず約80名と今回よりも30名も多かった。全体的に石井先生、岩崎先生等をはじめとする先生方が主導された対話であった感は否めない。

その点、今回の対話はリードタイムも十分あり、学生も自主的な判断で参加したものが多かったと考えられ、また学生：シニア＝5：2という経験上最も効果のある組み合わせであったので充実した対話になったと考えられる。

今回、対話のテーマは予めグループごとに決められており、そのテーマに興味を有する者が集められていたので、対話開始から比較的短時間で本題の議論ができた。ただ、知識や経験のレベルがシニアと学生では格段に違い、どうしてもこちらの有するものを一方的に話すという形になりやすい。適宜、質問を入れ、「彼ら自ら考えるチャンスを与えたか」というのが毎度の反省であり、今回も例外ではなかった。対話は何度やっても難しいというのが実感である。

以上